

【特集】ベーシックインカム運動研究の地平 ：月に1ペニーでもベーシックインカム？ ：ベーシックインカムの閾値概念の歴史

仲林, 陸[訳] / 林, 麟太郎[訳] / 山森, 亮[著・監訳・解題]
/ YAMAMORI, Toru

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / Journal of Ohara Institute for Social Research

(巻 / Volume)

778

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

27

(発行年 / Year)

2023-08

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030026>

月に1ペニーでもベーシックインカム？

——ベーシックインカムの閾値概念の歴史

山森亮 著・監訳・解題／仲林陸・林麟太郎 訳

【 解 題 】

ここに訳出された論文は、以下のものである。翻訳と転載の許可をいただいた掲載誌 *Basic Income Studies* に感謝する。

Toru Yamamori, 2022, Is a Penny a Month a Basic Income? A Historiography of the Concept of a Threshold in Basic Income, *Basic Income Studies*, 17(1): 29-51.

<https://doi.org/10.1515/bis-2021-0037>

学術雑誌 *Basic Income Studies* は、2006年に創刊された学際的な雑誌である。雑誌名から類推されるように、少なくともベーシックインカム (Basic Income) とは何かについて一定の知識を持っている人びとを読者層として想定している。後述するように原論文はまさしくその「ベーシックインカム (Basic Income) とは何か」に関わる問題を扱っているのだが、それでも掲載誌の性質上、初歩的な事柄については周知のこととして、かならずしも丁寧に説明されていない。これらの事柄について、ここで補足的に説明しておきたい。

まず第一に、ベーシックインカムという言葉自体は、(少なくとも英語圏では)「基本的必要を満たすに足る所得」という程度の意味で、漠然と使われてきた言葉である。そこにそれ以上のどのような限定をつけて使うかはいろいろな使用方法があり、その意味で多義的に使われていた言葉である。

第二に、少なくとも1960年代から1980年代にかけて、この言葉は、「すべての人に基本的必要を満たす最低所得を保証する政策」という意味で、最低所得 (minimum income) とか保証所得 (guaranteed income) といった言葉と互換的に使われてきた。

第三に、1980年代半ばに、イギリスでベーシックインカム研究グループ (Basic Income Research Group: BIRG)、欧州規模ではベーシックインカム欧州ネットワーク (Basic Income European Network: BIEN) など、いくつかのベーシックインカムに関する研究 (を活動に含む) 団体が結成された。前者は、現在まで継続的に存在しているベーシックインカムに関する組織としては最初のもの (1984年)、後者は、国際的な組織としては最初のものであると思われる (1986年)。さまざまな分野の研究者や活動家が一堂に会して、ベーシックインカムを定義するという画

期的な時期であった。

第四に、論文中に何度も出てくる、フィリップ・ヴァンパリース (Philippe van Parijs) はベルギーの高名な政治哲学者である。1986年に、ベーシックインカムを主題としたものとしてはおそらく初めての国際会議が開催されたが、ヴァンパリースはこの会議を主催したグループの中心人物の一人であった。その会議では上記BIENの設立が決まり、彼は長年にわたり同組織の共同議長を務めた。1995年に出版された『すべての人に真の自由を——資本主義を正当化できるものがあるとなればそれは何だろうか』(van Parijs, 1995)は、英語圏の分析的政治哲学の領域でベーシックインカムについてさまざまな研究がなされる嚆矢となると同時に、さまざまな学問分野でベーシックインカムが真剣な研究の対象と見なされるようになるにあたって大きな役割を果たした。

第五に、現在、上記で言及した二つの団体 (BIRGは現在は名称をシティズン・ベーシックインカム・トラストに変更、BIENは欧州ネットワークから地球ネットワークへ変更) や、ヴァンパリースに共通するベーシックインカムの定義は、その社会の合法的な居住者すべての人に、個人単位で、定期的に、普遍的に、無条件で、政府 (あるいはそれに類する機関) から支払われる給付というものである。ここで、「個人単位」とは、第一に、少なくとも成人については本人に支給されるということである。第二に、世帯規模によって一人当たりの金額を調整したりしないということである。「定期的」とは、毎週、毎月、毎年などのかたちで決まった頻度で支払われるということである。「普遍的」とは、資力調査や所得調査などをせず、すべての人が対象となるという意味である。「無条件」とは、稼働能力の活用をしているか、就労の意志があるかなどを問わないということである。

第六に、上記の定義に照らせば、たとえばひと月たった1円でもベーシックインカムとなってしまう。他方で、少なくとも1980年代半ばまでは、ベーシックインカムは基本的な必要を満たす水準であると、上記の2団体も含め誰もが考えていた。現在では、引き続きそのように考える人たちと、1円でもベーシックインカムだと考える人たちがいて、混乱が生じている。

本論文が扱うのはこの混乱である。ベーシックインカムの定義に関わる諸問題のうち、この問題を、閾値 (threshold) をめぐる問題として整理し、現状とそこから生じる諸問題を検討するとともに、現状に至る経緯について歴史的に位置づけたものである。その内容については屋上屋を重ねることになるのでここでは繰り返さない。

* * *

翻訳は、冒頭より5節第1段落までを仲林陸さん、5節第2段落以降を林麟太郎さん、謝辞を監訳者が担当した。訳者と監訳者での検討会を経て、最終的には監訳者が訳語を統一したり訳文を変更した箇所がある。誤り等があればその責は監訳者に帰する。

監訳者かつ原著者として、これまで多くの方にお世話になってきた。原論文謝辞に記載できなかった出版以降のものは以下のとおりである。フライブルク大学のベーシックインカム研究所 (Freiburg institute for basic income studies) で共同研究をしている 'UBI and gender' 班での、クレム・デイヴィズ (Clem Davies) さん、クローエ・ハルペニー (Chloe Halpenney) さん、ジェシカ・シュルツ (Jessica Schulz) さん、アルマズ・ゼレキ (Almaz Zelleke) さんとの "Feminist definitions of UBI" をめぐる議論には勇気づけられてきた。その内容の一部は、2022年10月に開

かれた同研究所年次大会で報告されている。BIEN 内に 2019 年に設置された「ベーシックインカムの定義の明確化 (the Clarification of Basic Income Definition)」作業部会の共同座長を原著者は務めているが、同作業部会の議論は本稿公刊後も継続している。2022 年 9 月の BIEN 大会では、本論文が提起する問題についてのシンポジウムの座長を務める機会をいただき、アン・B・ライアン (Anne B. Ryan) さんとハルペニーさんには貴重な報告をいただいた。同じく 2022 年 9 月に、岡野内正さんには、大原社会問題研究所での研究会で報告の機会をいただいた。その場での岡野内さんはじめ参加者の方々のコメントに、本論文が日本語圏でも一石を投じうる内容があることを教えていただいた。『大原社会問題研究所雑誌』の岡野内さんおよび藤原千沙さんには本翻訳のお声がけをいただいた。また *Basic Income Studies* 編集主幹のルイズ・ハグ (Louise Haagh) さんには本論文の翻訳出版についてご快諾いただいた。これらすべてに感謝している。なお、本論文は、2021 年度の *Basic Income Studies* 最優秀論文賞を受賞している。選考委員の皆さんに謝意を表したい。同賞をいただくのは、2014 年度に 'A Feminist Way to Unconditional Basic Income: Claimants Unions and Women's Liberation Movements in 1970s Britain' にいただいて以来である。2014 年の賞は、その論文で描かれた、ベーシックインカムを要求したイギリス労働者階級の「忘れられた」女性たちとその闘いに与えられたものと考えてきた。今回の受賞も、本論文で叙述した歴史の背後にある人びとの集合的な実践に与えられたものと理解している。

*なお、原文のイタリックは訳文では傍点にしている。注は原論文のものであり、訳注は文末に付した。本文中の [] は訳者による補足である。

【 翻 訳 】

- 1 はじめに
- 2 明らかな想定
- 3 ベーシックインカムのご二つの定義
- 4 定義から「閾値」を省いて何か問題があるのだろうか？
- 5 BIEN2016 年会議での討論
- 6 閾値のない定義の正当化
- 7 結論

1 はじめに

月に1ペニーでもベーシックインカムといえるだろうか[訳注1]。「資力調査や就労要件なしに、個人単位で全員に無条件に提供される定期的な現金給付」というベーシックインカム地球ネットワーク（Basic Income Earth Network : BIEN）によるベーシックインカムの定義に従うと、もしその1ペニーが個人に対して、普遍的に、無条件に支払われているのなら答えは「イエス」である。

ひと月あたり1ペニーが、どのようにして「共産主義への資本主義の道」になるのか、どのようにして「ノーと言う力としての自由」を私たちに与えるのかについて当惑する人もいるかもしれない。この両方とも、ベーシックインカムによって達成できることの例として、(BIENの共同議長を務めた)著名な研究者たちによって論じられてきた。本稿では、BIENによる現行の[ベーシックインカムの]定義に賛成したり反対したりする意図はない。本論文の意図は、この定義を歴史的に位置づけることで、実りある議論を可能にすることにある。

本稿では以下のように議論が進む。1970年代から80年代にかけての時期は、[ベーシックインカムについての]学術的研究と公共の議論が活発になったが、この時期に広く共有されていた前提があった。それは、「最低限」とか「適切な」といった言葉で表されるような閾値ないし水準の概念がベーシックインカムの不可欠の構成要素であるというものである。このような前提は、ベーシックインカムという用語(およびそれに似た用語)が最初に使用されたころ(現在のところ1919年まで遡れる)にも存在した。次に明らかにされるのは、1980年代後半から1990年代前半にかけて主要な提唱者たちによって(意図的であったかどうかはともかく)定義の変更が行われたことである。この変更によって、現在まで、二つの定義が同時に並立して存在している状況が作り出された。この時に定義が変更されたという事実は、まるで私たちが集団の健忘症に陥っているかのように、忘れ去られているようである。そのため本稿の第一の目的は、歴史修正主義からこの忘れられた歴史的事実を救うことである。第二の目的は、閾値概念を除外する特定の定義、つまり閾値なしの定義の長所と短所について説明する。短所としては、論理的、歴史的、政治的の三つの欠点があることが明らかにされる。ついで、閾値のない定義を正当化する以下のような二つの理由を紹介する。第一に、そのような閾値を見極めることの論争的な性質と現実的な困難、第二に、ベーシック

インカムの定義から「生存維持 [を可能にする水準という要素]」を除外することで、「無条件」を強調することの潜在的なメリット。これらに加えて好意的な解釈として、閾値のない定義を正当化できそうな三つの理由を提示しよう。すなわち、閾値を決定する際の社会サービスの役割、「社会配当」のいくつかのバージョンなどの) 関連する理念の考慮、ベーシックインカムの水準の経済的変動である。

2 明らかな想定

「共産主義への資本主義の道」というタイトルの画期的な論文で、ロバート・ファンデルヴェーン (Robert van der Veen) とフィリップ・ヴァンパリース (Philippe van Parijs) は、「ベーシックインカム」の概念を「保証所得 (Guaranteed Income)」というより広い概念と区別し、前者のメリットを主張した。ベーシックインカムについての彼らの説明は、「すべての個人は、他の収入源からの収入が何であれ、完全に無条件の普遍的な給付金またはベーシックインカムを受ける権利があり、その水準は(基本的必要の大まかな代用物としての) 年齢や障害の程度などの変数にのみ依存する」というものである (van der Veen & van Parijs, 1986, p.162. 傍点は van der Veen & van Parijs, 下線部は著者)。基本的必要を満たすものとしてのベーシックインカムという理解は、彼らの「共産主義への資本主義の道」という主要な議論にとって不可欠である⁽¹⁾。

ベーシックインカム (または私たちが現在ベーシックインカムと呼んでいるもの) を、基本的必要を満たすのに十分な所得として人びとが理解していることを示す、他の例を見つけることは容易である。ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill) の『政治経済学原理』第2版 (Mill, 1849) での好意的な議論から始まり、長い1970年代 [訳注2] のイギリスの労働者階級の女性解放運動の要求 (Yamamori, 2014) を経て、カール・ワイダークイスト (Karl Widerquist) による『ノーと言う力としての自由』 (Widerquist, 2013) までに至る⁽²⁾。

ベーシックインカムに批判的な人たちに目を転じよう。ベーシックインカムが人びとを怠惰にし、仕事を忌避させるのではないかと恐れる批判は、ベーシックインカムは人びとがそれに頼り切って生活をする、つまり基本的必要を満たすのに十分であると想定している。実現可能性 [が低いと] という観点から批判する人たちも、同様の想定を立てている。互酬性原理に基づいた批判をしている人たちの間でさえ ([この批判は] 閾値があるかどうかに関係なく [なりたつものなのだが])、ベーシックインカムを、すべての市民が「有給の仕事をする必要性から解放される」こ

(1) 彼らの理解では、「共産主義」とは、「それぞれ (社会のすべての人) が必要に応じて (所得を分配される)」状態である。van der Veen & van Parijs (1986) を参照。

(2) このリストには以下のようにさらに文献を加えることができる。1848年のジョセフ・シャルリエの「保証された最低限」(Charlier, 1848)、1918年のE.メイベル・ミルナーとデニス・ミルナーの「国家ボーナス」(Milner & Milner, 1918)、1952年のC.E.エアーズの「基本独立所得」(Ayres, 1952)、および1972年のJ.E.ミードの「修正なしの社会配当」(Meade, 1972)。実際、このリストは非常に長くなりうる。4節で少し異なる視点から再検討する。

とを保障するものと想定する人もいる (Rothstein, 2017) ⁽³⁾。

これらの想定は、基本的必要を満たすとか、生活費に足る、生存維持水準に相当する、適切である、最低限度を構成するなどといったさまざまな言葉で表現されてきた。明らかに、「適切な」という状態は通常、「最低限」であることとは異なる何かを意味し、適切な所得または最低限の所得のどちらを要求に掲げるべきかについて、いくつかの運動では議論されてきた (Yamamori, 2014)。これらの想定に共通しているのは、それらのすべてがベーシックインカムの必須要素として特定の最小閾値を前提としているということである。本稿では、この最小閾値の省略形として「閾値」という用語を使用する。最大閾値を意味するものではない。

3 ベーシックインカムの二つの定義

では、なぜこの広く共有されている想定が、BIEN の定義から除外されているのだろうか。実際のところ、この想定を明示的に含む定義は今も昔もたくさんある一方で、BIEN の定義のように、この想定を省略した定義も見られる。いわば、二つの定義上の系統が並行して存在してきた。

(1) 閾値を含む定義

閾値が含まれる定義の系統から先に見ていこう。1984年に設立された英国の組織であるベーシックインカム研究グループ (Basic Income Research Group: BIRG) の規約では、以下のようにベーシックインカムの定義に閾値の概念が含まれていた。「ベーシックインカムはすべての男性、女性、子どもの住民に支払われる […]。それは基本的な生活を可能にする所得を提供し、その水準は主に年齢に依存する ⁽⁴⁾。BIRG Bulletin (1988年春号) で、BIRG と BIEN の両方の創設メンバーであるビル・ジョーダン (Bill Jordan) は、BIRG は「ベーシックインカムを定義づける」四つの基準を採用していると述べている。その「四つのうち」最初の基準は「適切さ —— 貧困を防ぐのに十分な保証された生活水準」であった (Jordan, 1988, p.3. 傍点は著者)。BIRG と BIEN の別の創設メンバーである アニー・ミラー (Annie Miller) は、ベーシックインカム案には多くの種類があるが、すべてが四つの共通の原則を共有しているとしている。これら四つのうちの一つは、「各個人は、自動的に各人の口座に振り込まれる適切なベーシックインカムを受ける権利がある」というものである (Miller, 1984, p.71)。

フィリップ・ヴァンパリースは、ベーシックインカムに関する最初の国際会議の出席者 (およびその他の関係者) に宛てた 1986 年の手紙の中で、BIEN の設立を通知しただけでなく、ベーシックインカムを「資力調査や労働意欲についての要件なしに、個人単位で給付される最低所得」と定

(3) マルコム・トリー (Malcolm Torry) はそれを「欠陥のある定義」と批判している (Torry, 2017b)。私はロススタインの定義に「欠陥がある」とは思わない。むしろ真正な定義の一つと考える。そのうえで、トリーが指し示す「議論は合理的であるべきだ。そのためには定義への注意が必要である […]」(Torry, 2017b) という方向性に導かれてきた。この論文は、彼の指し示す方向性へのささやかな一歩である。

(4) BIRG (1984), p.1, 傍点は著者。BIRG (1985) で紹介される定義はわずかに異なるが、依然として閾値の概念を保持している: 「すべての男性と女性、子どもは基本的な生活費を満たすのに十分な独立した収入を得るための無条件の権利を与えられる」(p.1, 傍点は著者)。

義した（van Parijs, 1986b. 傍点は著者）。ここでの「最低」という言葉は、明らかに閾値を含意している⁽⁵⁾。1989年にヴァンパリース自身が中心になって開催された国際会議で発表された彼の基調報告的論文「ベーシックインカムの倫理的基盤について」では、ベーシックインカムを七つの構成要素で定義している。その七つのうちの一つは閾値に関わるもので「人の基本的必要を満たすのに十分であるもの」である（van Parijs, 1989a, pp.4-6; van Trier, 1995, pp.6-7. 傍点は著者）。彼は続けて、「これは、標準的に理解されているように、『ベーシックインカム』の「基本的」の一つの含意である」と説明した（van Parijs, 1989a, p.6）。またこの「ベーシックインカム」を、彼自身が「普遍手当 universal grant」と呼ぶ、閾値が欠落したものと区別していることも注目に値する。

この閾値を含む定義の系統は、今日まで存在し続けている。BIENの共同議長を長年務めたガイ・スタンディング（Guy Standing）は、2011年の著書で次のように書いている。

この「ベーシックインカムという」提案の核心は、国またはコミュニティのすべての合法的居住者、成人だけでなく子どもにも、毎月穏当な額が支払われるべきだということである。各個人は、基本的必要を満たす金額を毎月引き出すことができ、適切だと思うことに使うことができるキャッシュカードを持つことになるだろう。障害などの特別な必要を満たすための追加給付もこのカードから引き出すことができるだろう⁽⁶⁾。

カール・ワイダークイストは、『自立、無財産、およびベーシックインカム：ノーと言う力としての自由の理論』の序章で、ベーシックインカムと負の所得税からなる「ベーシックインカム保証（Basic Income Guarantee：BIG）」の概念を採用している。BIGは、「誰もが基本的必要を満たすのに十分な定期的な現金所得を持っていることを政府が無条件に保証すること」である⁽⁷⁾。パルグレイヴ・マクミラン（Palgrave Macmillan）の叢書『ベーシックインカム保証を探求する』は、おそらくベーシックインカムに関する最大の学術書シリーズであるが、上記とほぼ同じ定義⁽⁸⁾を採用している。BIENの公式関連団体である米国ベーシックインカム保証ネットワークも同様である⁽⁹⁾。

欧州規模のネットワークであり、BIENの公式関連団体でもある無条件ベーシックインカム・欧州（Unconditional Basic Income Europe：UBIE）は、普遍的、個人的、無条件、そして十分に高

(5) この最初の会議で発表されたヴァンパリースの「用語解説」の中で、彼は「最低所得を保証する四つの方法」にも言及しており、そのうちの一つがベーシックインカムである。ここでも、閾値はベーシックインカムの不可欠な部分として前提されているようである（van Parijs, 1986a）。

(6) Standing（2011）, p.171, 傍点は著者。Standing（2009, 2017）では、ベーシックインカムの定義は別の言葉で表現されているが、それでもなお閾値は保持されている。

(7) Widerquist（2013）第1章。傍点は著者。

(8) 「ベーシックインカム保証（BIG）は、すべての市民が基本的必要を満たすのに十分な収入を得られるように政府による無条件の保証となるように設計されている」（Widerquist, 2013, 傍点は著者）。叢書の編集者は、カール・ワイダークイスト、ジェームズ・ブライアン（James Bryan）、マイケル A. ルイス（Michael A. Lewis）である。

(9) 「ベーシックインカム保証（BIG）は政府が保証するものであり、いかなる理由であれ、収入が大部分の基本的必要を満たすために不可欠な水準を下回ることはない。」<https://usbig.net/about-big/>（2021年7月26日最終閲覧）

い「水準」というベーシックインカムの特徴を説明している。最後の特徴の詳細は以下のとおり。

給付金額は、当該国の社会的および文化的標準を満たす適切な生活水準を提供するものでなければならない。それは、物質的な貧困を防ぎ、社会に参加し尊厳を持って生きる機会を提供するものでなければならない⁽¹⁰⁾。

BIEN のもう一つの公式関連団体であるベーシックインカム・アイルランド (Basic Income Ireland) は、ベーシックインカムを「追加の収入がなくても、質素とはいえ、まともな生活を送るのに十分な」ものとして提示している⁽¹¹⁾。スコットランドの市民ベーシックインカム実行可能性研究推進グループ (Citizens' Basic Income Feasibility Study Steering Group) は、スコットランドでのベーシックインカム実験計画の実現可能性を評価するために 2018 年から 2020 年まで活動を行った。その際に採用された定義によれば、ベーシックインカムには四つの鍵となる要素があり、そのうちの一つは「十分に基本的必要を満たす最低限の支払い」である⁽¹²⁾。

(2) 閾値なしの定義

閾値なしの定義の系統に移ろう。BIEN の最初の会議の主催者は 1986 年にベーシックインカムに閾値があるように説明したが、同団体は現在ベーシックインカムを「資力調査や就労要件なしで、個人単位で無条件にすべての人に提供される定期的な現金給付」と定義している⁽¹³⁾。この定義は 2016 年に改訂されたものだが、それ以前の 1988 年に採用された定義でも、閾値への言及はなかった⁽¹⁴⁾。

BIRG は、(上記で見たように) 当初は閾値を伴う定義を採用していた。同団体は名称を数回変更し、現在は市民ベーシックインカム・トラスト (Citizen's Basic Income Trust: CBIT) と呼ばれている。そして団体名だけでなくベーシックインカムの定義も変更した。現在の定義は、以下の五つの基準を持つ「すべての市民のための無条件の所得」である。五つの基準とは、無条件であること、自動的であること、減額されたり打ち切られたりしないこと、個人単位であること、市民権としての給付であることである⁽¹⁵⁾。閾値はない。

フィリップ・ヴァンパリースは、上記で見たように、ベーシックインカムの記述と正当化の双方で、基本的必要を満たすという閾値を前提として、ベーシックインカムを記述していたし、その正

(10) <https://www.ubie.org/who-we-are/> (2021 年 7 月 26 日最終閲覧) 傍点は著者。

(11) <https://basicincome.ie/faq/> (2021 年 8 月 13 日最終閲覧) 傍点は著者。マルコルム・トリーによると、閾値があるベーシックインカムの定義は私が引用した BIEN の三つの公式関連組織 (米国, 欧州, アイルランド) のみならず、南アフリカ, オーストラリア, オーストリア, ブラジル, カナダ, ドイツ, インド, オランダ, ノルウェー, ポルトガル, スイスなど、他の多くの組織によっても採用されている (Torry, 2017a)。

(12) <https://www.basicincome.scot/what-is-basic-income> (2021 年 7 月 26 日最終閲覧) 傍点は著者。

(13) <https://www.basicincome.scot/what-is-basic-income> (2021 年 7 月 26 日最終閲覧)。

(14) 「資力調査や就労要件なしに、個人単位ですべての人に無条件に与えられる所得」(BIEN, 1988)。

(15) <https://citizensincome.org/citizens-income/what-is-it/> (2021 年 7 月 31 日最終閲覧)。

当化を行っていた。しかし1989年から1992年の間に、彼はベーシックインカムの定義を変更した⁽¹⁶⁾。彼による新しい定義は、BIENが1988年に採用した定義とまったく同じである。その定義は「資力調査や就労要件なしに、個人単位ですべての人に無条件に支払われる所得」というものである。以下の引用から明らかのように、彼の以前の定義に存在していた基本的必要に関する閾値が削除されたことは明らかである。

ただし、「ベーシックインカム」という表現は、いわゆる基本的必要との関連を示唆するものではない。原理的にいえば、ベーシックインカムは個人の基本的必要を満たすのに十分と見なされる所得の水準に満たない場合もあれば、それを超える場合もある（van Parijs, 1992a, p.4）。

この注釈の追加は、以前とは正反対の方向への転換である。というのもこの注釈が書かれるたった三年前には、「人の基本的必要を満たすのに十分な」所得として「ベーシックインカム」を彼は定義し、それが「ベーシックインカム」の「基本的」という言葉の意味であると述べていたのだから。

4 定義から「閾値」を省いて何か問題があるのだろうか？

これらの閾値を持たない定義によれば、「ひと月あたり1ペニー」でも（「もしその1ペニーが、個人単位で、普遍的に、無条件に支払われるのなら」）真正なベーシックインカムとして分類される。それには何か問題があるのだろうか。以下では、論理的問題、歴史的問題、政治的問題の順にみていこう。

(1) 論理的断絶

[先に紹介した]CBITの事例にそくして見ていこう。この団体の[当初のではなく、現在の]定義によれば、無条件に、自動的に、個人単位で、減額されたり打ち切られたりせず、市民権として支払われる場合、1か月あたり1ペニーでもベーシックインカムとなる。CBITによれば、このベーシックインカムは：

—安全な金銭的な土台——その土台の上に生活を築きあげていくことができる——を提供する

(16) van Parijs (1989b, 1991, 1992c) での定義/定式化は、彼の考えの変遷を見るうえで興味深いものである。van Parijs (1989b) で、彼はベーシックインカムや「普遍手当」ではなく「無条件所得 (unconditional income)」という用語を使用した。そしてそれには二つの異なる水準が存在するとされる。一つは、ある閾値を満たす水準の無条件所得である。「物質的な欲求の一定水準の充足は、無条件の収入という形で…すべての人に与えられる。」(p.485, 傍点は原文)。もう一つは、社会の生産性が向上した場合に可能となる、望ましい水準である。「生産性の向上により、すべての人に無条件に給付できる所得の水準が、すべての人が十分に満足できる量の財を購入することができる水準まで高くなる。このようなより完全なバージョンに[無条件所得は]発展しうる」(p.485)。van Parijs (1991) では、ベーシックインカムについて次のように閾値を満たすものとして記述している。「資力調査も就労(意欲)要件もなしで、個人単位の、保証最低所得 (p. 102, 傍点は著者)。最後に、van Parijs (1992c) では、彼はすでにベーシックインカムを基本的必要の概念から切り離している。そのうえで、これまでの諸提案が「典型的には、保証された無条件の最低所得という形態」(pp.471-472, 傍点は著者)であったことを認めている。

- 所得保障を強化すると同時に、雇用市場がより柔軟になることを可能にする
- どのくらいの時間雇用されるかについてのより多くの選択肢をすべての人に与える
- [無報酬の] ケアラー [carer: 家事・育児・介護などに従事している人] が、ケア [に関わる時間] とその他の責任のバランスを取ることを可能にする
- 新規事業の立ち上げや自営業に従事することを容易にする
- 個人の自由、創造性、ボランティアなどの自発的活動を奨励する⁽¹⁷⁾

1 か月僅か1ペニーで、(一般的にいつでも、またCBITが拠点とする今日の英国という文脈でも) どのようにして上記のようなさまざまなことが可能になるのかは、まったく明らかではない。CBITがベーシックインカムと定義するものと、CBITがベーシックインカムによって可能になると考えているものの間に、論理的に言えば、何か飛躍があるようだ。[上記でベーシックインカムが可能にするとされる] 途方もない結果は、実際には[ベーシックインカムによって] 基本的必要が満たされるということが前提されているが、この前提はどこにも書かれていない。同様の論理的欠落は、ベーシックインカムの学術的および一般的な正当化の(すべてではないが) 多くに見られる⁽¹⁸⁾。

論理に関わるもう一つの問題は、「完全 (full) ベーシックインカム」/「部分 (partial) ベーシックインカム」という表現が、閾値のない定義を採用する組織や提唱者、研究者たちによっても広く使われていることに関するものである。「完全ベーシックインカム」とは、一定の閾値に等しいかそれを超える水準のものを指し、「部分ベーシックインカム」とは、その閾値を下回る水準のものを指す。したがってこの「完全-部分」という用語は、閾値を前提にしているものである。ヴァンパリースは、定義から閾値を除外したうえで、なおこの「完全-部分」という区分を(上記の意味で) 使用することは論理的に一貫していないと指摘している (van Parijs, 1992a, p.30)。月に1ペニーがベーシックインカムの定義を完全に満たす世界で、月に200ポンドを部分ベーシックインカムとする根拠はないように思われる。いったい何の「部分」なのだろうか。

(2) 歴史的修正主義

閾値を省いた定義の二つ目の問題は、そのような定義は、少なくとも1970年代から1980年代にかけて(おそらく多くの人にとって、今日に至るまで) 学界であろうと社会運動であろうと、人びとにとってベーシックインカムが意味していたものとは異なることである。

学界の状況をもう少し詳しくみていこう。ヴァンパリースが閾値なしの定義を導入したまさにその本では、何人かの寄稿者が、ベーシックインカムには閾値が伴うことを、明示的に定義したか、暗黙のうちに想定していた。アイルランドの哲学者であるジョン・ベイカー (John Baker) は、

(17) <https://citizensincome.org/citizens-income/why-do-we-need-it/> (2021年7月31日最終閲覧)。

(18) ベーシックインカムを閾値なしで定義する提唱者の幾人かは、より注意深く慎重である。すなわちベーシックインカムをそれがもたらすならかのメリットによって正当化しようとする際に、ベーシックインカムの前に「かなりの[額の]」、「それなりの規模の」、「持続可能な限り最大の」、または「十分な」などの形容詞を付けている。たとえば、van Parijs (1992b, 1995) や Birnbaum (2012) を参照。

「基本的必要を満たすに十分であることはベーシックインカムの定義の一部」とした（Baker, 1992, p.126）。オックスフォード、LSE、コロンビア、シカゴで教鞭をとったイギリスの哲学者ブライアン・バリーは、ベーシックインカムが満たすべき基準を定めており、そのうちの一つは「誰もがそのみで生活できる水準に設定されている」こととした（Barry, 1992, p.137）。イギリスの別の哲学者のリチャード・ノーマンは、「ベーシックインカムを定義づける二つの特徴」について書いており、そのうちの一つは、「基本的必要を満たすのに十分である」ことである（Norman, 1992, p.141）。

ベーシックインカムについて、これらの哲学者は誤解していたのだろうか。それとも、彼らは象牙の塔の中で、外の世界で流通している定義とは別の風変わりな哲学的定義を生み出していたのだろうか。どちらにも当てはまらないことを示したいと思う。1960年代後半から1970年代にかけて、ベーシックインカムという用語は現在よりも漠然と使われていた。1980年代になって、[ベーシックインカムという用語で指し示されていたいくつかの] 諸概念を区別し、定義を精緻化していった。前者の漠然とした使用法と、後者の精密な定式化の双方で、その核心に閾値概念は含まれていた。

1960年代後半から1970年代にかけて、ベーシックインカム、保証所得（guaranteed income）、最低所得（minimum income）などのさまざまな概念が流通していた。それらは漠然と、また相互換的に使用されていた。そしてそのどの用語が指し示す内容も閾値を伴っていた。ときにそれは明示的に、適切な（adequate）、ベーシック、最低限（minimum）などの言葉で示されていた（Steensland, 2008; Yamamori, 2014）。

1980年代に、学者や政策立案者はこれらの用語を区別し始めたが、ほとんどの場合、依然として閾値の概念を含んでいた⁽¹⁹⁾。無条件の所得給付という概念を指し示すものとしてベーシックインカムという用語が選択されたことについて、決定的な動きは以下の二つであった。一つは1982年初めにイギリスの国会議員であるブランドン・リースウィリアムズ（Brandon Rhys Williams）によって「ベーシックインカム保証」が提案されたことであった。もう一つは1984年のBIRGの結成である。収入保証の提案がされ、そして1984年にBIRGが設立された。ハーマイオニー・パーカー（Hermione Parker）によるとリースウィリアムズの提案は（無条件の所得給付という意味での）ベーシックインカムという用語の「英国で最初の公式使用」であった。パーカーは下院の研究助手であり、リースウィリアムズの下で働き、BIRGの共同設立者でもあった（Parker, 1989, p.123）。ブランドン・リースウィリアムズは1960年代に、同様の構想を「普遍的な定額手当」という名前で提案していたが、それは「すべての人に最低限の所得」を給付するもので、明示的に閾値を含んでいた。彼の1982年の提案は、「実質的にすべての既存の社会保障給付を[新しいベーシックインカム給付で]置き換える」ことを意図している（Torry, 2021, pp.131-132）、閾値が想定されていた。BIRGの場合も、前述のように閾値は明示的に定義に書き込まれていた。

メディアでは、両方の使用法（ベーシックインカムが保証所得一般を漠然と指す場合と、無条件所得を指す場合）が1980年代初頭には存在した。『タイムズ』紙 [1785年創刊のイギリスの新聞]

(19) この区別が、より早く1970年代に行われた事例について、Yamamori (2014) を参照。

は1982年に、ベーシックインカムを保証所得のさまざまな構想を含む包括的な概念として使用し、無条件所得を表すものとして「社会配当」という用語を使用した。同紙が1983年に掲載した、K.V. ロバーツ (K.V. Roberts) と J.M. アボット (J.M. Abbott) による書簡には、ベーシックインカムは無条件所得を意味するものとして使用されている。どちらの場合でも、「すべての人の必要を満たすのに十分なもの」(前者)と「基礎生活所得」(後者)などの表現から明らかのように、閾値の概念を伴っていた⁽²⁰⁾。

上記で検討した時期以前の状況も、それほど変わらない。現在の意味で(閾値有りであれ無しであれ)使用されているベーシックインカムという用語の詳細な系譜学はまだ書かれていないだろうし、それをここで書くことは、私の能力を超えている。しかしそれでもなお、このベーシックインカムという川の上流に足を踏み入れて、支流や小川に向きを変えることなく源泉まで遡行してみよう⁽²¹⁾。先行研究(Cunliffe, Erreygers & van Trier, 2004)によれば、「ベーシックインカム」という表現が、英語で出版された文献で[無条件所得という意味で]初めて使われたのは、ジョージ D.H. コール (George D.H. Cole) の1953年の著作である (Cole, 1953, p.310)。コールがこの言葉を使ったのは、ジョン・スチュアート・ミルに言及した際である。ミルは『政治経済学』の第2版で、「共同体のすべての成員の生活維持のために、一定の最低限が最初に分配される」というフリーエ主義者の構想を好意的に紹介していた (Mill, 1849, vol.1, p.260. 傍点は著者)。これには閾値の概念が付随している。私たちの遡行の範囲を、[出版されていない]個人的な通信にまで拡張するならば、無条件所得としての「ベーシックインカム」という用語の使用は、1939年にジョージ・ワズブラ (George Wansbrough) がジョン・メイナード・ケインズ (John Maynard Keynes) に宛てた手紙にまで遡ることができる (Sloman, 2019, p.70)。そこでも同様に閾値の概念が想定されている⁽²²⁾。

私たちの遡行を英語以外にも広げるとすれば、オランダのスーフィー運動の中心にいたフーベルト・パウルス・ファン・タイル・ファン・セルースケルケン (Hubert Paulus van Tuyll van Serooskerken) が「ベーシックインカム (basis-inkomen)」の計画を書き、それをオランダの経済

(20) 前者は、『タイムズ』紙(イギリス, ロンドン)の1982年4月12日月曜日の記事「左派が福祉に関する新しい政策を発表」(社会福祉通信員, 61205号, p.2)。後者はRoberts & Abbott (1983)。

(21) 以下の二つの留保についてここで明示しておいた方がよいかもしれない。一つ目の留保は、以下の記述はベーシックインカムおよび類似の用語(「ベーシック」と「インカム」の間に[語が]挿入された用語)の歴史のうち、その使用が多かれ少なかれ現在の(閾値有り無し)のどちらかの)定義と一致しているものについての簡単な概要である。これが現在のベーシックインカムの定義に一致する考えの完全な歴史という形をとっていない理由は二つある。一つは、使用される定義(閾値の有無)に応じて、記述すべき内容が異なってしまう、これは目的に照らしてあまり意味をなさないからである。もう一つは以下の点である。すなわちそのような試みは、クエンティン・スキナー (Quentin Skinner) が警告した「教義の神話」、「予期の神話」、「偏狭性の神話」からののがれることが困難である (Skinner, 1969)。このうち最初のものについて、ベーシックインカムの歴史について語るときに特に留意すべきものであることを、ピーター・スローマン (Peter Sloman), ダニエル・ザモラ・ヴァルガス (Daniel Zamora Vargas), ペドロ・ラモス・ピント (Pedro Ramos Pinto) は、正しく思い出させてくれる (Sloman et al., 2021)。二つ目の留保は、ここで蛮勇をふるって行っている歴史記述は、あくまでも暫定的なものであるということだ。

(22) これを親切に指摘してくれたピーター・スローマンに感謝する。

学者ヤン・ティンバーゲン（Jan Tinbergen）にコメントを求めて送った1932年にまで遡ることができる⁽²³⁾。1933年3月3日の『ファーダーラント（*Het Vaderland*）』（オランダの新聞）によると、ファン・タイル・ファン・セルースケルケンは、ベーシックインカム（basis-inkomen）の導入を通じて階級社会と貧困を解消するためのワーキンググループを結成した⁽²⁴⁾。[先述のティンバーゲン宛の]手紙とこの新聞の双方で、「basis-inkomen」が意味するのは、「すべての人が基本的必要を満たす所得を共同体によって提供される」ということである。したがって、この概念のオランダの起源にも閾値があるといえよう。

類似しているがまったく同じではない使用法、すなわち「ベーシック」と「インカム」の間に単語が挿入されたものまで広げると、私たちの遡行は1919年に遡ることができる。英国の社会改革者であるデニス・ミルナー（Dennis Milner）は妻のE.メイベル・ミルナー（E. Mabel Milner）とともに「国家ボーナス（state bonus）」を1918年に提唱した。彼は翌1919年に新聞に掲載された公開書簡で、自身の提案を「基本最低所得」と呼んだ（Milner, 1919）。彼の提案は、すべての人に等しく「生活と自由を維持するのにちょうど十分な」^{ベーシック・ミニマム・インカム} 金銭を毎週支払うことであった（Milner

(23) van Tuyll van Serooskerke (1932)。ティンバーゲンがファンタイル・ファンセルースケルケンにどのように返答したかは（またそもそも返答したかどうか）不明である。ティンバーゲン自身がベーシックインカムについて議論し始めた年は1934年と考えられていた（Cunliffe et al., 2004; Jäger, 2021）。アントン・イエーガー（Anton Jäger）はティンバーゲンについて以下のように述べている。「G.D.H. コールは『ベーシックインカム』という用語を何度も使っており、ティンバーゲンによるこの用語の使用はコール由来である。そのため、[後のオランダ語でのベーシックインカムを意味する一語の basisinkomen ではなく] ハイフネーション [つきの basis-inkomen] が使用された」（Jäger, 2021, p.124）。ティンバーゲンのこの着想がコールから来たのかファンタイル・ファンセルースケルケンに由来するものかを私は推測する立場にない。ただし1930年代初頭のオランダ語での使用に先立って、（無条件所得という意味で）ベーシックインカムという用語をコールが使ったという証拠を、管見の限り発見できていない。さらに、コールの提案とは異なり、ファンタイル・ファンセルースケルケンの提案にはあいまいな部分があり、無条件所得としても理解できるが、ある閾値と各人が得ている他の所得との差を埋め合わせるための支払いが行われる最低所得保証としても理解しうる。なお、この論文が受理された後、ウォルター・ヴァントリアー（Walter van Trier）は、1932年後半にティンバーゲンが「basisinkomen」へ言及している事例を見つけたと私に知らせてきた。これは、オランダ語圏の「ベーシックインカム（basis (-) inkomen）」の系譜学を書き換えることになる。この点に照らしても本論文でのオランダ語圏についての歴史記述は暫定的なものであり、ヴァントリアーの新しい調査結果が発表されたときに、私たちはさらに詳しく知ることができる。

(24) この点を親切に教示してくれたヴァントリアーに感謝する。

& Milner, 1918, p.125. 傍点は著者)⁽²⁵⁾。これはまさに私たちが現在ベーシックインカムと呼んでいるものであり、閾値がある。したがって [これまで説明してきたコール、ワンズブラ、ファン・タイル・ファン・セルスケルケン、ミルナーのどれを源流と見なすにせよ]、はじめに閾値ありき、だったといえるだろう⁽²⁶⁾。

さらには、1970年代や1980年代初頭のケースで見られたように、無条件（またはそれに似た）所得という意味でのベーシックインカムという（またはそれに似た）用語は、他の用法でのベーシックインカムという用語から孤立しているわけではない。社会がそのすべての構成員に保証すべき社会的最低限としてのベーシックインカムという、漠然とした意味でのこの用語の使用は、管見の限りでは、1920年代初頭に遡る。この場合も閾値があった（Piddington, 1921）。

ここでのベーシックインカムという用語の歴史学的再検討から得られることは何であろうか。ベーシックインカムは閾値を含むものとして当初より長期にわたって広範に使用されてきた事実の説明や、そのような広く使われてきた定義をなぜ破棄すべきかの理由についての説明なしに、（閾値概念を除外することで）新しく作り出された定義を [まるでその新しい定義しか存在してこなかったかのよう] に使用し始めるとしたら、それは歴史修正主義の行為になると私は考える⁽²⁷⁾。

(25) G.D.H. コールは、1920年にミルナーの提案に言及し（Cole, 1920）、後に彼自身の提案を展開した。彼にとって好ましい用語は「社会配当」であったが、時には他の名前を使用した。そのうちの一つは「基本最低所得（basic minimum income）」であった（Cole, 1935, p.225）。ミルナーとコール（およびミード）の間の知的な影響は van Trier (2018) で詳細に分析されている。ただし6節で触れることになるが、コールの提案は、純粋な無条件ではないことに注意する必要がある。アメリカの制度派経済学者のクラレンス E. エアーズ（Clarence E. Ayres）は、「基本自立所得（basic independent income）」を主張した。この用語で彼が意味したのは閾値のあるものとしてのベーシックインカムであったことは以下の言明からも明らかである：「『生活維持の最低限（minimum of subsistence）』を満たすのにちょうど十分な、そしてすべての人に等しい、基本自立所得」（Ayres, 1952, p.262）。エアーズは後に、ロバート・テオバルド（Robert Theobald）が編集した書籍『保証所得（*The Guaranteed Income*）』に寄稿した。同書は、1960年代後半から1970年代にかけて北米での保証所得をめぐる議論に影響を与えた。これ [北米での保証所得をめぐる言説] は、「保証適切所得（guaranteed adequate income）」や「保証最低所得（guaranteed minimum income）」などの用語が、「保証所得」という集合の一部として分類されていることを思い出させるものである。このことと同様の分類が、「ベーシック・ミニマム・インカム」「ベーシック・インデペンデント・インカム」「基本最低所得」「基本自立所得」「ベーシックインカム」に適用できると私は想定する。もしもその想定が間違いであれば、閾値ありのベーシックインカムの起源は1919年ではなく、これまでのところ最大限に遡ることが可能である1932年のものになる。

(26) ベーシックインカムという用語の歴史から、この考えを提唱する社会運動の歴史に目を転じると、その場合でも同様に、1930年代から少なくとも1980年代——社会運動からもBIENの創立会議に多くの参加があった——まで、ほとんどの場合、閾値があった。そして今日でも、多くの社会運動は、閾値のあるベーシックインカムを思い描いている。月に1ペニーの給付のために、人びとは闘ってきたわけではない。1960年代末から1970年代にかけてのイギリスの女性解放運動の事例については、Yamamori (2014) を参照。

(27) 2021年のBIEN会議やその他の機会に、以下のような応答があった。すなわち、BIENやヴァンパリースによる「ベーシックインカム」という用語の選択は、英語での使用ではなく、ドイツ語の「ベーシックインカム〔Grundeinkommen〕」の使用に従ったものである。ドイツ語での「ベーシック〔Grund〕」は英語での「ベーシック〔basic〕」が指すものとは異なり、基本的必要という概念とはまったく関係がない。そのため、BIENまたはヴァンパリースの使用する「ベーシックインカム」は閾値を含まないし、それは歴史的修正主義ではない、というものである。これは非常に興味深い主張である。ドイツ語の「Grundeinkommen（ベーシックインカム）」が「Grundbedürfnisse（ドイツ語で「基本的必要」を表す用語）」とまったく関係ないかどうかを判断する立場に私はいない。ここでは代わりに、1980年代から現在に至るまでほとんどの場合、「Grundeinkommen」の概念が閾値を伴っていたことを指摘することにとどめたい。

(3) 政治的な危険

ベーシックインカム論者の多くは、過去も現在も、ベーシックインカムは少なくとも基本的必要を満たす水準にあるべきだと想定しているだけでなく、ベーシックインカムの実施を通じて、最も不遇な人びとの苦境を改善することも想定している。

しかし今日、既存の社会政策を低い「ベーシックインカム」に置き換えるという提案が見られる。もしそのような代替が起こった場合、多くの脆弱な人びとはより貧しく、より脆弱になるだろう⁽²⁸⁾。多くの議論がベーシックインカムの導入と既存の福祉制度の廃止に焦点を当ててきたことは事実である。このような議論のいくつかは、基本的必要を満たすものとしてのベーシックインカムという想定または定義に基づいている。もしこの想定または定義が今ではあまり目立たないとしたら、主要な組織や提唱者が閾値のない定義を採用することを好み、過去（少なくとも1980年代）に存在した暗黙の同意に言及することを避けたためである。ここで指摘している危険の具体例として、CBITの事例をとりあげよう。「現在の福利厚生と税制を〔ベーシックインカムに〕置き換える必要がある」とCBITは主張しているが、そのCBITによるベーシックインカムの定義によれば、1か月当たりわずか1ペニーの金額でもベーシックインカムだというのだ⁽²⁹⁾。

5 BIEN2016年会議での討論

上記で概説した問題のいくつかは、国際的なベーシックインカム共同体の間で、厳密に学術的な方法で明確に表現されてこなかったとしても、問題として認識されてきた。2016年のBIENの総会で、この問題は公式に議論されるに至った（BIENの総会はBIENの意思決定が行われる場で、大会の最後に開かれる。大会および総会は2016年までは隔年、それ以降は毎年開催）。〔ベーシックインカムの〕定義に関する二つの動議がこの時の総会に提出された。どちらの動議も、表現は異なるが、定義内または定義への注記として閾値への言及を行うよう求めた。一つ目の決議案は、BIENの17人の生涯会員と六つの公式関連団体（UBIE およびドイツ、オーストリア、オランダ、韓国、イタリア）によって提出された。閾値の考え方を要約した文言は、ベーシックインカムは「生計（物質的生存）を確保し、すべての人にとって政治的共同体（国）への参加を可能にする」というものであった⁽³⁰⁾。二番目の決議はルイーズ・ハグによって提出された。彼女は当時のBIENの共同議長の一人であり、次の二つの定式化のいずれかを追加することを提案した。

- a. 栄養や健康を維持することができ、また、十分性についての広く認められた一国あるいは国際的な標準に沿って尊厳ある生活を送ることを可能にする生活水準を満たすに少なくとも十分な額

(28) たとえば日本では、社会扶助と年金を廃止して「ベーシックインカム」を導入するという提案が近年いくつかあるが、これらの提案での「ベーシックインカム」の金額は社会扶助の金額よりも低くなっている。

(29) <https://citizensincome.org/faqs>.

(30) https://basicincome.org/wp-content/uploads/2016/06/5.c-Statute-proposal-2016-05-21_BIEN-final-5.pdf (2021年7月31日最終閲覧)。この動議は、もともと2014年の総会に提出されたが、総会の時間的制約のために審議未了となった。

のベーシックインカムを、BIEN は支持する。

もしくは、

b. 完全ベーシックインカムとは、栄養や健康を維持することができ、また、充分性についての広く認められた一国あるいは国際的な標準に沿って尊厳ある生活を送ることを可能にする生活水準を満たすに少なくとも十分な金額のものである。部分的なベーシックインカムとはそれより金額が少ないものを指す。⁽³¹⁾

論理的には、(a) と (b) は異なっている。(a) は定義が閾値を含むべきか否かという点について未決であり、一定の水準の閾値以上の額のベーシックインカムを BIEN は支持していると解釈できる。対照的に、(b) はベーシックインカムの概念は閾値を伴うことを想定している。というのも「完全-部分」の用語法は、閾値を前提とするからである。

同じ事柄に対する二つの別個の動議を〔総会の場で〕公平に扱うことは困難を伴う。仮に一本目の動議が採用されると、二本目の動議はその意義を失う。そのため二つの動議を一つにまとめることを試みる作業部会が設置され、著者はその座長に任命された。議論は三日間の大会会期を通して実施された。いったんは、動議 (b) に沿って、定義に閾値を書き込む方向で合意を得たかにみえた。しかし閾値をどのように表現するかについて、合意に達することはできなかった。最終的に、上記 (a) に沿って閾値の問題を処理することが決定された。閾値については、定義に関わるものとは別の動議を出すこととなった。そこでは閾値について以下のように言語化されている。

2016年7月9日にソウルで実施されたBIEN総会参加者の大多数は、次のようなベーシックインカムを支持することに賛同した。支払いの頻度や水準が一定で、かつその水準は、他の社会サービスと結合することで、物質的貧困を廃絶し、すべての個人の社会的・文化的活動への参画を可能にするという政策戦略の一部として十分に高いものであること。そして、ベーシックインカムの導入と引き換えに社会サービスや他の給付が廃止されようとする場合、仮にその廃止によって、相対的に不利であったり、脆弱な立場にいる人びと、また低所得の人びとの状況が悪化するのであれば、私たちは廃止に反対する。

上記の文言が、定義の説明の一部として、BIENのホームページ上で定義のすぐ近くに記載されるとの共通理解のもとに、この折衷案で合意に達することが可能になった。この折衷案は定期大会で可決され、しばらく定義と同じページに表示されていた⁽³²⁾。

(31) https://basicincome.org/wp-content/uploads/2016/06/5.d_Proposal_to_amend_BIENs_description_of_basic_income_LH.pdf. (2021年7月31日最終閲覧)

(32) どういうわけか、今ではBIENホームページの定義のページから削除されている。座長としての著者の調停を信頼し、妥協していただいた人びとには謝罪することしかできない。作業部会の議論と結論の報告については、Yamamori (2016b) を参照。総会での決定については、Yamamori (2016a) を参照。

6 閾値のない定義の正当化

(1) 既存の正当化論 1：正確な額の特定は困難である

マルコム・トリーの「定義とは何か？そしてどのようにして私たちはベーシックインカムを定義すべきか？(Torry, 2017a)」と「ベーシックインカムの定義と特徴 (Torry, 2019)」の2本の論文は、現在の定義に関わる難問についての優れた概括的紹介となっている。「生活を可能にする水準 (subsistence level)」に触れない定義をトリーは正当化しているが、そのような正当化の中でトリーのもは最もよく展開されたものだと著者は考える。トリーは三つの理由を挙げている。第一に、「『生活を可能にする水準』は定義の困難さで悪名高い」。第二に、「生活を可能にする水準」を含む定義は、「政府が少額のベーシックインカムから実施する可能性を考慮することを支援」しないだろう。第三に、閾値を含む定義は、その定義を採用するあらゆる団体から「より低い水準のベーシックインカムについて調査したり、検討したりする機会」を奪うだろう。

ここで著者は1点目が最も重要性を帯びていると考える [2点目, 3点目に反論することは容易だ]⁽³³⁾。生活を可能にする水準を見極めるのは困難であることは事実である。しかしながら、ベーシックインカムの定義に含まれる「普遍的 (universal)」についても同じことが言えるだろう。普遍的であることの境界線はどこにあるのだろうか。地球全体なのだろうか。それともたとえばイギリスだろうか。あるいはスコットランドなのか。もしくはインヴァネス [スコットランドの都市] だろうか。ここで仮にその回答をイギリスとしてみよう。それでは、ベーシックインカムは市民権を持つ人びとだけに限定されるのだろうか。それとも市民権を持たない住民も含まれるのだろうか。これらの実用上の困難をもって、ベーシックインカムの私たちの定義から「普遍性」を外すべきだと言うことにはならないだろう⁽³⁴⁾。「生活を可能にする水準」の場合も同様ではないのだろうか。

トリーについて公平に説明すると、彼は定義が金額 (amount) を含むべきかどうかについて話していて、それに反対する論陣を張っている。定義によって正確な金額を決定すべきではないとするトリーに、著者は全幅的に賛成である。そのうえで、定義が閾値を含むべきかどうかは、定義によって正確な金額を決定すべきかどうか、とは異なった問いである。従って、厳密にいうと、上記は閾値を含まない定義の正当化ではない⁽³⁵⁾。そしてユルゲン・ドヴィスペラーレ (Jurgen De

(33) トリーが挙げる第二や第三の理由については、その批判がもっともな場合もあるかもしれない。しかし一般化することはできないと著者は考える。2点目について、一つだけ質問したい。仮に定義を狭めたら、政府は狭まった定義によって除外されてしまう政策を実施する気力を失ってしまうのだろうか。国際的なベーシックインカム共同体は、「無条件性」を強調することでベーシックインカムの意味を狭め、故に最低所得保証を除外している。今のところ、それは条件付きの最低所得の政策を実施する政府の気力を失わせているだろうか。3点目について、尋ねたい。多くの支持者や組織は、「無条件」を強調することで、ベーシックインカムと負の所得税を区別している。これらの人びとや組織は、負の所得税についての結果や研究を黙殺しているだろうか。どちらにおいても、トリーの指摘に該当しない場合が簡単に見つけられる。

(34) 「普遍的」という言葉が何を意味するかについて、私は テレマク・マソンレシボン (Télémaque Masson-Récipon) から多くのことを学んだ。

(35) Torry (2020) は閾値を特定しようとするときの、実用上の問題に関する優れた分析である。

Wispelaere) とリンジー・スタートン (Lindsay Stirton) による以下の言明はベーシックインカムへも同じように適用されるだろう。

現代の福祉社会における基本的必要を描写するさまざまな方法について、膨大な文献が存在する。これらの文献のほとんどが、社会に均一な生活を可能にする水準を決定することについて、何らかの恣意性があることを受け容れつつ、それでもその恣意的な基準ですら、社会政策に有用な目的に資することが多々あることを私たちは認識すべきだ (De Wispelaere & Stirton, 2004, p.271)。(36)

(2) 既存の正当化論 2：生活を可能にする水準から無条件性を分離する

全員が賛同してくれるだろうと思うが、フィリップ・ヴァンパリースはベーシックインカムを哲学の領域で真剣な考察の対象とすることに最も貢献してきた。前述のように、ベーシックインカムについてのヴァンパリースの議論は、1980年代なかばには、閾値を前提としたものだった。そして後になって閾値のない定義を採用した。定義を変更した理由についてはヴァンパリースは語っていないが、閾値のない定義の利点については、ヤニック・ヴァンデルボルト (Yannick Vanderborght) との共著の中で以下のように記している。

共通の使用法にしたがって、我々が採用した定義の有益な点は、以下の二つの大きな問題を便利に分割可能にすることである。すなわち、当該の政策構想がベーシックインカムとしての資格に値するほど十分に無条件であるかどうかという問題と、その構想が適切な水準であるかどうかという問題である (van Parijs & Vanderborght, 2017, p.10. 傍点は筆者)。

残念ながら、閾値なしの定義はまったく「共通の使用法」ではない。これまで見てきたように、(この定義に) 競合する定義が先立って、また並行して存在していた。さらには、ヴァンパリース自身が1986年と1989年に閾値を前提としていた。加えて、彼が編集し出版した本では、その重要な部分で、閾値のある定義に基づいた議論がされているし、さらには、彼自身が「共通の使用法」として閾値を含むベーシックインカムの定義を示している (van Parijs, 1989a, p.6)。

そのうえで、著者は、無条件性の問題を、生活を可能にする水準の問題から分析的に区別することの重要性について、全面的にヴァンパリースに賛同する。しかしながら、この重要性を理解するために、ベーシックインカムの意味を変更してまで、1970年代と1980年代の「一般的な使用法」から離れる必要があったのだろうか。前述のとおり、ヴァンパリース自身が以前、閾値をベーシックインカムにおける不可欠な構成要素の一つと認めただけで、閾値のあるベーシックインカムと閾値のない「普遍手当 (universal grants)」とを区別している。生活を可能にする水準という問題と、無条件性という問題とを分離するためには、ベーシックインカムと「普遍手当」とを区別すれば、十分ではないのだろうか。

(36) 必要性と相対的貧困の概念が十分に理論化されていない現状については、Yamamori (2019) を参照。経済学における必要の概念については Yamamori (2017, 2018, 2020) を参照。

ここまでの「二つの」議論は、前節で特定された、閾値を定義から追放することで生じる問題を十分に克服できているとは述べ難い。従って次項以降では、いくつか想定される正当化論を提示したい。

（3） 想定される正当化論 1：社会サービスと金銭給付

閾値を含む（たとえば、「基本的必要を満たす」、「生活を可能にする水準」や「Xを満たすのに十分に高い」）ことで生じるかもしれない問題の一つは、たとえば誰かが基本的必要を満たすことができるかどうかは、ベーシックインカムだけでなく、市場を含むより広い社会システムや他の社会政策の関数でもあるという点である。

原則的にいえば、この問題は定義から閾値を追放する正当な理由にはならない。同じことが、既存の最低所得保証制度とそれに代わるあらゆる制度の両方に当てはまるからである。すべての最低所得保証制度（たとえば生活保護制度など）から閾値の概念を削除しなければならないのだろうか。[そのようなはずはない。]

しかしながら、この問題は以下のような誤解との関連でもう少し丁寧に議論しておくべきだろう。すなわち、ベーシックインカムが社会サービスを含む他のすべての社会政策に置き換わるべきであるという学界と公共空間の双方に見受けられる理解（または誤解）である。そして、定義に閾値を定めることがこのような誤解を助長する可能性がある。この誤解を避けるためには、以下のよう二つの方法あるだろう。

一つは、ベーシックインカムの意味を現金だけでなく現物にも拡大することである。ヴァンパリースは「現物でのベーシックインカム」という表現をしているが、これはこの方向性での議論である（van Parijs, 1995, pp.42-45）⁽³⁷⁾。もう一つは、（どのような表現で記述されるとしても）ある閾値は、ベーシックインカムと社会サービスとによって満たされると述べることである。この内容は、BIEN2016の定義作業部会によって採用され、5節で紹介したとおり、その時に可決された閾値に関する決議に記載された。

（4） 想定される正当化論 2：ベーシックインカムと社会配当

すでに紹介したように、現在遡及できる最も古い用法では、「ベーシックインカム」という用語は閾値の概念を伴っていた。このことは、1980年代なかばまでベーシックインカムがどのように用いられていたかについても（明確に定義されていた場合でも、暗黙の了解であった場合でも）同

(37) このヴァンパリースの議論を思い出させてくれたテレマク・マソンレシボンに感謝したい。ヴァンパリースはこの議論を1991年から断続的に提起している。van Parijs & Vanderborght (2017) では、ベーシックインカムを「現金給付」として強調することで、（この議論を）放棄しているようにみえる一方で、van Parijs (2021) ではこの議論を継続しているようである。マソンレシボンはこのヴァンパリースの「現物でのベーシックインカム」概念に熱心に取り組んでいる。それゆえ、さらなる分析と詳しい説明はマソンレシボンとヴァンパリース自身に委ねることとする。ここでは、現物でのベーシックインカムや現物での社会配当といった議論についての事例を紹介することにどめよう。コールは現物での「社会配当」に言及している（Cole, 1944, p.144）、4節で紹介した、間に語の挿入がない形でベーシックインカムが初めて使用された時（オランダでの basis-inkomen）、現物での「所得inkomen」が明示的に含まれていた（van Tuyl van Serooskerke, 1932）。

様である。しかしながら、1970年代と1980年代にベーシックインカムと類似の意味で使用されていた「社会配当」という用語の場合は、事情は異なる。

「社会配当」が閾値の概念を伴う場合は数多く見受けられる。たとえば、G.D.H. コール (Cole, 1935), ジェームズ E. ミード (Meade, 1948, 1972), アンソニー B. アトキンソン (Atkinson, 1969), ハイマン・ミンスキー (Minsky, 1969) など。しかし、「社会配当」が、閾値を含まない形で使用される場合もみつけることが可能である。たとえば、ジョーン・ロビンソン (Joan Robinson) の場合がそうである (Robinson, 1969)。

実際、「社会配当」という用語は、ケンブリッジの経済学者や、彼(女)らと密接な関係にある経済学者の間では、かなり緩やかに使われていたのである。その使用方法では閾値がない提案が含まれるだけでなく、無条件ではない条件付きの提案も含まれていた。たとえばコールが1935年に使用した「社会配当」は閾値の概念を含んでいる。しかし、働くことはできるが働きたくない人には支払われないという点で無条件ではなく条件付きであった⁽³⁸⁾。従って、社会配当という用語の歴史的な用法を理由に、ベーシックインカムの定義から閾値の考え方を追放する必要がある場合、おそらく無条件性も定義から追放しなければならない。そうするといった定義には何が残るのであるうか。

(5) 想定される正当化論 3: ベーシックインカムの水準と景気変動

ここまでの議論から、ヴァンパリースが彼のベーシックインカムの定義から閾値を除いたことを見てきた。これは、ヴァンパリースが望ましいと考えるベーシックインカムに大きな変化があったことを意味するものではない。彼が望ましいと考えるのは「持続可能な範囲で最大の水準のベーシックインカム」である (van Parijs, 1995)。どれほどの高い水準が持続可能な範囲かは、経済的な要因を含むさまざまな要因の関数である。ある状況では、月に0または1ペニーになりうるだろうし、別の状況では、基本的必要を満たす水準の3倍以上になりうるだろう。故に定義から閾値を削除することにより、ベーシックインカムのそのような変動を考慮することが可能である。これはジョーン・ロビンソンの定義する社会配当に非常に類似している (Robinson, 1969)。

ヴァンパリースが自身の定義を変更してから数十年経つが、変更した理由を明らかにはしていない。著者の推測では、これが少なくとも主な理由の一つではないだろうか。そしてまた、閾値を含まないベーシックインカムの定義の最も説得力のある正当化であるように、著者には思われる。にもかかわらず、この正当化はそのような閾値のない定義から生じる(4節で概説した)三つの問題の2番目、つまり歴史修正主義を依然として克服できないようにも思われる。

(38) コールは以下のように述べる:「社会配当は、健常者には、働く用意があることを条件に支払われる。そして、受給者の側に社会に貢献するつもりがないことが証明された場合には、社会配当の受給資格を問えるような手段が必要となるだろう」(Cole, 1935, p.263)。他方で、「万人に保障された」(p.225),「共同体すべての人びとへ」(p.252)など、コールの多くの言明は無条件を示唆するように見えるのだが。提言が明らかに条件付きでありながら、ベーシックインカムの歴史に含まれることが多いのは、コールだけではない。Juliet Rhys-Williams (1943) の提言も、そうした事例の一つである。

7 結論

ここまでの議論を要約しよう。初期の先駆的使用法と、1960年代後半から1980年代にかけて広く流通した使用法の両方で、ベーシックインカムは閾値を伴う概念であることが、明示的に定義されるか、または暗黙の共通理解となっていた。1980年代なかばに閾値のない定義が出現し、影響力のある一部の提唱者と組織は、閾値のある定義から閾値のない定義に意図的に変更するか、閾値のない定義を採用した。それらの変更や採用の理由は、もはや私たちの集合的記憶から静かに消えてしまったようである。

閾値のない定義の採用から生じる三つの問題を特定した。論理的断絶、歴史修正主義、政治的危険である。これらの問題のうちのいくつかを認識したことで、BIENは2016年にベーシックインカムの定義における閾値の問題について議論の場を設けた。また、本論文では、定義から閾値への言及を削除することについての、二つの既存の正当化論と三つの想定される正当化論を検討した。

ベーシックインカムという考え方は、その起源と歴史の両方において、ロールズの「格差原理」やヴァンパリースの「非優越的多様性」のような、純粋に学問的に生み出され議論されてきたものとは異なる (Rawls, 1971; van Parijs, 1995)。そして、その複合的な起源以来、閾値はベーシックインカムの不可欠な構成要素としてありつづけた。このことが意味するのは、以下のことである。すなわち、影響力のある一部の学者や組織が、閾値のない定義を正しいものと宣言するだけでは、ベーシックインカムの歴史や一般的な使用法を無視し、消し去るのに十分でないということである。とはいえ、これらの宣言は、ベーシックインカムの歴史に適切に位置づけられてはおらず、少なくとも学術的には、この数十年真剣に検討されてはこなかった。結果として、二つの定義が並行して存在している。

本論文はこの並行状態の解決を目的とはしていないが、ヴァンパリースが1989年に行ったベーシックインカムと普遍手当の区別は、可能な解決策の一つだろう。この区別は、ベーシックインカムの歴史(とそれを求めて奮闘した人びと)を無視することなく、「閾値のない定義」の利点のいくつかを活かすことが可能である。ここで、閾値を含むものがベーシックインカムで、閾値を含まないものが「普遍手当」である (van Parijs, 1989a)。別の機会でのヴァンパリースの用語法に従えば、「普遍手当」の代わりに「無条件所得 (unconditional income)」と呼んでもよいかもしれない (van Parijs, 1989b, 1992c)。

個人的には、ベーシックインカムの定義から閾値の概念を捨てることは、ことわざでいう「たらいの水と一緒に赤子を流す」ことと同じような行為だと思う。とはいえ、この論文は、閾値のない定義を採用している組織に定義を変更すべきだと示唆する意図で書かれたものではない。著者のささやかな望みは、第一に、ベーシックインカムの閾値の概念を、歴史修正主義とその後起こった集合的記憶の忘却から救いだすことである。これが本論文の最も重要な目的であり、純粋に学術的なものである。第二に、これらのベーシックインカム共同体における定義にまつわる議論が、適切な歴史認識に基づいたもの、その歴史を創りあげてきた人びとの集合的な(知的であれ社会的なものであれ)運動への敬意に基づいたものとなることである。

(やまもり・とおる 同志社大学経済学部教授)
(なかばやし・りく 同志社大学経済学部4回生)
(はやし・りんたろう 株式会社 IKC)

【訳注】

訳注1：ペニーは、イギリスの通貨単位で、1ポンドの百分の1。約1円70銭（2023年4月20日現在）。

訳注2：1968年から1979年までを指す。

【謝辞】

ビル・ジョーダン (Bill Jordan) , マルコム・トリリー (Malcolm Torry) , 故フィリップ・ヴィンス (Philip Vince: 2015年逝去) , フィリップ・ヴァンパリース (Philippe van Parijs) に感謝したい。彼らは私を国際的なベーシックインカム共同体へと導いてくれた。2001年にジョーダン、トリリー、ヴィンスを訪ねた。彼らの温かい歓待は、この「ベーシックインカムという」主題について英語という私にとってまったく得意でない言語で研究することへと駆り立てた。2004年にパルセロナで行われたBIENの大会で報告を行ったが、ヴァンパリースがその分科会の座長を務めてくれていて、温かいコメントをくれただけではなく、聴衆からの批判——その批判はベーシックインカムと負の所得税との混同に基づいていた——に対して、報告者の拙い応答より成功裏に、その誤解に基づく批判に応答してくれた。この出会いは私を、BIENの生涯会員へと導いただけではなく、定義の持つ重要性について認識させることとなった。

2016年のBIENの大会での、定義をめぐる作業部会——私はその部会の座長だった——での議論に参加したすべての人に感謝したい。また、2019年にBIENの総会で設立され現在も続いている「ベーシックインカムの定義の明確化 (the Clarification of Basic Income Definition)」作業部会——私はアニー・ミラー (Annie Miller) とともに共同座長を務めている——での議論に参加したすべての人にも感謝したい。2016年の機会には、一方で当時BIENの共同議長の二人 (ルイーズ・ハグ Louise Haagh およびカール・ワイダークイスト Karl Widerquist) , 他方で動議を提出した諸グループの代表者たち (すべての名前を記すことはできないが、とりわけ オラフ・ミヒヤエル・オスタータグ Olaf Michael Ostertag, エイドリアン・プランケン Adriaan Planken, ガブリエラ・シュミット Gabriele Schmidt) の双方からの信頼と協同に感謝している。

ヴァンパリースとヴォルター・ヴァントリアー (Walter van Trier) は親切にも、初期の草稿を読んでコメントをしてくれたり、関連した初期の非公刊資料 (van Parijs, 1986a, 1986b, 1989a) を送ってくれたりした。ロシタ・アレクサンドロヴァ (Rositza Alexandrova) , ジョン・ベイカー (John Baker) , ユルゲン・ドヴィスペラーレ (Jurgen De Wispelaere) , ジョーダン, テレマク・マソンレシボン (Télémaque Masson-Réçipon) , ミラー, ピーター・スローマン (Peter Sloman) も初期の草稿を読んで、有益で励みになるコメントをもらった。これらすべてにとても感謝している。1930年代オランダでの 'basis-inkomen' の使用について、ヴァントリアーとアントン・イエーガー (Anton Jäger) それぞれとのやり取り、およびエラスムス大学ロッテルダムのティンバーゲン・アーカイブのリザ・シルヴィウス (Liza Silvius) の支援と教示に多くを負っている。初期の草稿は、2021年8月のBIEN大会で報告する機会があり、そこでの建設的な議論に勇気づけられた。本稿のもととなった研究の一部は、日本学術振興会の科学研究費による財政的支援を受けている (19K12621)。これらすべてに感謝している。このように多くの人びとの支援のもとに本稿は書かれているが、にもかかわらず、本稿で示された見解は (およびそれに付随する誤りがあるとすれ

ばそれも）私個人のものである。

【参考文献】

- Atkinson, A. B. (1969). *Poverty in Britain and the reform of social security*. Cambridge University Press.
- Ayres, C. E. (1952). *The industrial economy: Its technological basis and institutional destiny*. Houghton-Mifflin.
- Baker, J. (1992). An egalitarian case for basic income. In P. van Parijs (Ed.), *Arguing for basic income: Ethical foundation for a radical reform* (pp. 101–127). Verso.
- Barry, B. (1992). Equality yes, basic income no. In P. van Parijs (Ed.), *Arguing for basic income: Ethical foundation for a radical reform* (pp. 128–140). Verso.
- BIEN (1988). *Basic Income European Network Statutes*.
- BIRG (1984). *Basic Income Research Group Bulletin*, 1. Autumn 1984. <https://citizensincome.org/wp-content/uploads/2016/01/1984-Bulletin-1-Autumn.pdf> [Accessed 26 July 2021].
- BIRG (1985). *Basic Income Research Group Bulletin*, 3. Spring 1985. <https://citizensincome.org/wp-content/uploads/1989/12/1985-Bulletin-3-Spring.pdf> [Accessed 26 July 2021].
- Birnbaum, S. (2012). *Basic income reconsidered: Social justice, liberalism, and the demands of equality*. Palgrave Macmillan.
- Charlier, J. (1848). *Solution du problème social ou constitution humanitaire, basée sur la loi naturelle, et précédée de l'exposé de motifs* (extracts translated by John Cunliffe and Guido Erreygers). Reprinted in Cunliffe & Erreygers (Eds.) (2004). pp. 103–120.
- Cole, G. D. H. (1920). *Social theory*. Fledrick A. Stokes Company.
- Cole, G. D. H. (1935). *Principles of economic planning*. Macmillan.
- Cole, G. D. H. (1944). *Money: Its present and future*. Cassell and Company.
- Cole, G. D. H. (1953). *Socialist thought, the forerunners, 1789–1850* (A history of socialist thought, vol. 1). Macmillan.
- Cunliffe, J., & Erreygers, G. (Eds.). (2004). *The origins of universal grants: An anthology of historical writings on basic capital and basic income*. Palgrave Macmillan.
- Cunliffe, J., Erreygers, G., & van Trier, W. (2004). *Historical note: Jan Tinbergen and basic income*. Mimeo.
- De Wispelaere, J., & Stirton, L. (2004). Many faces of universal basic income. *The Political Quarterly*, 75 (3), 266–274.
- Jäger, A. (2021). Free of our labors and joined back to nature. In Sloman et al. (Eds.), *Basic income and the politics of post-work in France and the low countries* (pp. 121–150).
- Jordan, B. (1988). What are basic incomes. *Basic Income Research Group Bulletin* 7. Spring 1988. <https://citizensincome.org/wp-content/uploads/1989/12/1988-Bulletin-7-Spring.pdf> [Accessed 26 July 2021].
- Meade, J. E. (1948). *Planning and the price mechanism: The liberal-socialist solution*. G. Allen & Unwin.
- Meade, J. E. (1972). Poverty in the welfare state. *Oxford Economic Papers*, 24 (3), 289–326.
- Mill, J. S. (1849). *Principles of political economy* (2nd ed.). Parker: John W.
- Miller, A. (1984). The failure of beveridge. *Quarterly Economic Commentary*, 10 (1), 69–72.
- Milner, D. (1919). The state bonus idea, (our letter box). *labour leader (newspaper)*. 20 February 1919, London, England (p. 10).
- Milner, E. M., & Milner, D. (1918). Scheme for a state bonus. Reprinted In Cunliffe, & Erreygers (Eds.) (2004) (pp. 121–133).
- Minsky, H. (1969). *The macroeconomics of a negative income tax*. Hyman P. Minsky Archive. Paper 429.
- Norman, R. (1992). Equality, needs, and basic income. In P. van Parijs (Ed.), *Arguing for basic income:*

- Ethical foundation for a radical reform* (pp. 141–152). Verso.
- Parker, H. (1989). *Instead of the dole: An enquiry in tax-benefit integration*. Routledge.
- Piddington, A. B. (1921). *The next step: A family basic income*. Macmillan.
- Rawls, J. (1971). *A theory of justice*. Harvard University Press.
- Rhys-Williams, J. (1943). Something to look forward to: A suggestion for a new social contract. Excerpts reprinted in Cunliffe & Erreygers (Eds.) (2004) (pp. 161–169).
- Roberts, K. V., & Abbott, J. M. (1983). When workers sink in the poverty pool (letter to the editor). *The Times*. London, England. 28 December 1983. Issue 61723. p. 11.
- Robinson, J. (1969). *Introduction to the theory of employment* (2nd ed.). Macmillan.
- Rothstein, B. (2017). UBI: A bad idea for the welfare state. *Social Europe*. 23rd November 2017. Retrieved from <https://socialeurope.eu/ubi-bad-idea-welfare-state> [Accessed 26 July 2021].
- Skinner, Q. (1969). Meaning and understanding in the history of ideas. *History and Theory*, 8 (1), 3–53.
- Slooman, P. (2019). *Transfer state: The idea of a guaranteed income and the politics of redistribution in modern Britain*. Oxford University Press.
- Slooman, P., Zamora Vargas, D., & Ramos Pinto, P. (Eds.). (2021). *Universal basic income in historical perspective*. Palgrave Macmillan.
- Standing, G. (2009). *Work after globalization: Building occupational citizenship*. Edward Elgar.
- Standing, G. (2011). *The precariat: The new dangerous class*. Bloomsbury.
- Standing, G. (2017). *Basic income: And how we can make it happen*. Penguin Books.
- Steenland, B. (2008). *The failed welfare revolution: America's struggle over guaranteed income policy*. Princeton University Press.
- Torry, M. (2017a). What's a definition? And how should we define 'basic income'? Retrieved from https://basicincome.org/wp-content/uploads/2015/01/Malcolm_Torry_Whats_a_definition_And_how_should_we_define_Basic_Income.pdf [Accessed 31 July 2021].
- Torry, M. (2017b). Universal basic income: Definitions and details. *Social Europe*. 11th December 2017. Retrieved from <https://socialeurope.eu/universal-basic-income-definitions-details> [Accessed 31 July 2021].
- Torry, M. (2019). The definition and characteristics of basic income. In M. Torry (Ed.), *The Palgrave international handbook of basic income* (pp. 15–29). Palgrave Macmillan.
- Torry, M. (2020). Minimum income standards in the basic income debate. In C. Deeming (Ed.), *Minimum income standard and reference budgets: International and comparative policy perspectives* (pp. 319–330). Policy Press.
- Torry, M. (2021). *Basic income: A history*. Edward Elgar.
- van der Veen, R. J., & van Parijs, P. (1986). *A capitalist road to communism*. Reprinted in van Parijs (1993) *Marxism recycled*. Cambridge University Press.
- van Parijs, P. (1986a). Basic income: A terminological note. In *The proceedings of the first international conference on basic income*. Louvain-la-neuve, Belgium. 4–6 September 1986.
- van Parijs, P. (1986b). *The aftermath of the conference*. 30 September 1986.
- van Parijs, P. (1989a). Background paper: On the ethical foundations of basic income (revised version). In *Prepared for the international conference on 'liberty, equality, ecology around the ethical foundations of basic income'*. Held in Louvain-la-Neuve on 1–2 September 1989.
- van Parijs, P. (1989b). Defence of abundance. *Canadian Journal of Philosophy*, 19 (sup1), 467–495.
- van Parijs, P. (1991). Why surfers should be fed: The liberal case for an unconditional basic income. *Philosophy & Public Affairs*, 20 (2), 101–131.
- van Parijs, P. (1992a). Competing justifications of basic income. In P. van Parijs (Ed.), *Arguing for basic income: Ethical foundation for a radical reform* (pp. 3–43). Verso.

- van Parijs, P. (1992b). The second marriage of justice and efficiency. In P. van Parijs (Ed.), *Arguing for basic income: Ethical foundation for a radical reform* (pp. 215–240). Verso.
- van Parijs, P. (1992c). Basic income capitalism. *Ethics*, 102 (3), 465–484.
- van Parijs, P. (1995). *Real freedom for all: What (if anything) can justify capitalism*. Oxford University Press.
- van Parijs, P. (2021). Unjust inequalities: Is maximin the answer? *Inequality: The IFS Deaton Review*. 23 September 2021. <https://ifs.org.uk/inequality/unjust-inequalities-is-maximin-the-answer/>.
- van Parijs, P., & Vanderborght, Y. (2017). *Basic income: A radical proposal for a free society and a sane economy*. Harvard University Press.
- van Trier, W. (1995). *Every one a king*. Katholieke Universiteit Leuven.
- van Trier, W. (2018). From James Meade's 'social dividend' to 'state bonus': An intriguing chapter in the history of a concept. *OEconomia: History, Methodology, Philosophy*, 8 (4), 439–474.
- van Tuyl van Serooskerke, H. P. (1932). Letter from H. P. van Tuyl van Serooskerke. Inventory number: NL-RtEUR_TBCOR01_002T007, Jan Tinbergen Archive. Erasmus University Rotterdam University Library.
- Widerquist, K. (2013). *Independence, propertylessness, and basic income: A theory of freedom as the power to say no*. Palgrave Macmillan.
- Yamamori, T. (2014). A feminist way to unconditional basic income: Claimants unions and women's liberation movements in 1970s Britain. *Basic Income Studies*, 9 (1–2), 1–24.
- Yamamori, T. (2016a). BIEN: The report from the general assembly. *Basic Income News*. 11 Oct 2016. Retrieved from <https://basicincome.org/news/2016/10/bien-report-general-assembly/> [Accessed 26 July 2021] .
- Yamamori, T. (2016b). International: BIEN's clarification of UBI. *Basic Income News*. 29 Oct 2016. Retrieved from <https://basicincome.org/news/2016/10/international-biens-clarification-ubi/> [Accessed 26 July 2021].
- Yamamori, T. (2017). The concept of need in Adam Smith. *Cambridge Journal of Economics*, 41 (2), 327–347.
- Yamamori, T. (2018). The concept of need in Amartya Sen: Commentary to the expanded edition of collective choice and social welfare. *Ethics and Social Welfare*, 12 (4), 387–392.
- Yamamori, T. (2019). The Smithian ontology of 'relative poverty': Revisiting the debate between Amartya Sen and Peter Townsend. *Journal of Economic Methodology*, 26 (1), 70–80.
- Yamamori, T. (2020). The intersubjective ontology of need in Carl Menger. *Cambridge Journal of Economics*, 44 (5), 1093–1113.